

[1] 肉体を彫る営み

1989年7月7日 東京新聞 夕刊

良い舞踊家はまずすぐれた容姿の持ち主でなくてはならないと、ふつうは考えがちである。

しかし、舞踊の美は、踊る人のもって生まれた美しさとは、まったく異なる次元に属するものだ。舞踊家にとって、生地の姿かたちは、歌手にとってのそれとたいして変わるところはない、とさえ私は思っている。条件の非常に厳しいバレエのようなものは、少し違うけれども、それとても傍目はために思うほどではない。細く長い手脚はもともそのようであるというよりは、細かい技術の積み重ねによってそのように見せているというほうが正しい。

どんなに美しいと見える人でも、踊りが良くなければ、その美しさは動き出した途端にぼろぼろと無残に剥はげ落ちる。逆の場合、動きそのものから、言いようもない美しさがかげろうのように匂においたち、凝集し、それが踊る人の姿と重なり合うと、時に肉体そのものが光を放つかとさえ思われる。肉体に宿るものでありながら、しかもなお肉体を超えるこうした美しさの本質は、いったい何なのだろうか。

美しさというものは、その種類にも在りようにも、制限というものが無い。そのような無限に存在しうる美のどれかを、舞踊家は自らの肉体のなかに探りあて、自らの肉体によって、文字どおり体現しなければならぬのだが、その素材たる肉体が、この世にたった一つしかないというのに、たいていはどうにもこうにも思いどおりには動いてくれない、手にあまる代物ときているから、舞踊家の腹立たしき、悔しき、孤独感、想像を絶すると思ってしまう間違まちがいはない。

●むしろ肉体を憎み

舞踊家が自分の容姿にナルシシズムを抱いているなど

[1] 肉体を彫る営み

1989年7月7日 東京新聞 夕刊

と思っただらとんでもないことである。かれらほど、自らの肉体に絶望し、これに厳しい目を向けているものはいない。ほとんど憎しみに近いものを感じてすらいるのではあるまいか。そうでなくては、到達しがたい美へむけての、あれほど厳しい修練をわれとわが身に加えることができるはずがない。しかも、そのように冷たく突き放したのちに、舞踊家はその肉体に限り無く深い目を注ぎ、入念な配慮を施してやまない。なぜなら、そのみが、唯一の素材、唯一の作品、それとなくしては自らの存在が成り立ちえない唯一の拠り所であるからだ。

ピエタ像を彫ったミケランジェロは、「私が大理石を像に形造っているのではない。像が大理石の塊のなかに潜んでいて、私はその周囲から、邪魔なものを取り除いているだけだ」と言ったという。

この言葉は、ある意味で舞踊家の仕事をそのままに言いつけるものである。ミケランジェロのように、舞踊家もまた、素材である自らの肉体を彫り刻む人だ。たゆまぬ修練は、その肉体から、その動きから、無駄なものをどんどん殺ぎ取っていく。

だがその残酷なまでの行為は、肉体を破壊するためのものでは決してない。これまたミケランジェロと同じく、そこにひとつの像を、ひとつの美を現前させるためのものである。

だが、舞踊家が彫り出すべき像とは、実のところ、何なのだろうか。ミケランジェロが見ていたのは、彼の美の理想で、それが石の中に潜んでいると彼が言ったのは、潜んでいると感じられるほどにも確固たるものとして、その美を実感していたということだろう。これがもし東洋の仏師の言葉であったなら、そこに無我無心を読み取るべきであるかもしれないが、イタリア・ルネッサンスの天才となればおのずと意味も別のものになる。

[1] 肉体を彫る営み

1989年7月7日 東京新聞 夕刊

舞踊家もまた、自分が彫り出さねばならない像に対して、もうひとつ別の意味での、しかし同じく確固たる実感をもっている。なぜならば、美の理想ということに関して、たとえミケランジェロほどの確信がなかったとしても、すくなくともそれは、自分自身以外の何ものでもないからである。舞踊家がわれとわが身を刻んで彫り出そうとしているもの、それは現にあるよりもなお美しい自分、より真実な自分、それを外なるものとして表現したときに初めて自分が真に自分になりうるような、自身自身の究極の理想である。その意味で舞踊家もまた、あらゆる芸術家の例にもれず、内なる自己をもとめて飽くなき探究を続ける者といふべきである。

しかし舞踊家が表現するもの、言葉をかえて言えば、自分の中から彫り出して見せる真実な自分とは、彫刻のように単に造形であるばかりではない。それは呼吸であり、リズムであり、起伏であり、意味の継起であり、物語である。

● やむにやまれず

『失われた時を求めて』を書いたブルーストは「健康な人にとって運動で汗をかくことが必要であるように、作家にとつてもものを書くことは必要だ」と言った。彼によれば、「文体はテクニクの問題ではなく、ものの見方の問題であつて」、「人は芸術によつてのみ、閉ざされた自分の外に出て、人それぞれのものの見方のなかにある質的な差異を明らかにすることができるのである」この言葉を、本物の舞踊家なら次のように読み変えるだろう、「舞踊家にとつて踊るといふことは、作家にとつてもものを書くこと同様、精神の営みを形にするためのやむにやまれぬ表現活動である」と。